

ゲリラ豪雨は数年前の流行語大賞にも選ばれ、最近よく見聞きするようになった言葉ですが、初出は古く昭和44年の新聞紙上といわれるマスコミ用語です。

集中豪雨とほぼ同じ意味で使われていますが、予測困難性などの違いから、それぞれを使い分ける場合もあるようです。気象学的な定義づけはなされておらず、気象庁では局地的大雨という表現をしています。

かつては大雨災害の最たるものといえば台風でしたが、伊勢湾台風後の昭和36年の災害対策基本法により、防災対策が強化され、事前予測が可能な台風の被害は減少してきました。

その一方で、短時間強雨の増加や、梅雨前線による集中豪雨の被害が目立つようになり、あわせて観測網や数値予報の予測範囲以下の、局地的で予測困難な集中豪雨が増えてきました。こうした局地的で同時多発する降り方から、そうした大雨はゲリラ豪雨と呼ばれ始めたようです。

ゲリラ豪雨の被害で特徴的なのは、道路の冠水などの浸水害ですが、これは表土が土からコンクリートやアスファルトへと変わり、雨水が一気に下水に流れ込む、いわゆる都市化の影響が大きく関わっています。

豪雨をもたらす積乱雲は、強い上昇流によって発生します。上昇流が強まるのは、「下層（地表面付近）へ暖かく湿った空気が流入したとき」や「上層（上空）へ冷たい空気が流入したとき」で、いわゆる「大気の状態が不安定」といわれる状態で、これは積乱雲が発達し大雨となりやすい気象状況を意味しています。

個々の積乱雲は高さ十数km、水平方向には数km～数十kmで、通常の積乱雲は寿命も短いのですが、強い上昇流が数時間続くスーパーセルと呼ばれる巨大積乱雲は、急激に発達し局地的に一時間100mmを超えるような猛烈な雨をもたらすこともあるのです。

こうしたゲリラ豪雨への対策は、行政や研究機関によってレーダーの高精度化と観測間隔の短縮などが、予測技術の面からは数値予報モデルの高精度化などが進められています。

まち中でもし遭遇してしまったら、落雷や竜巻、突風、降ひょうの恐れもありますから、浸水する可能性のある地下などは避け、安全な建物への避難するようにしましょう。